

土木学会選奨土木遺産
室戸台風後の災害復旧橋梁

た い ほう こ く 田井橋・方谷橋

岡山県高梁市



昭和9（1934）年9月21日、フィリピン沖で発生した室戸台風は、高知県室戸岬から中国、近畿地方を通過して日本海へ進み、西日本各地に被害を与えました。岡山県では高梁・旭・吉井の三川を中心に大洪水となり、死者・行方不明者145名、家屋の全半壊4560棟、床上浸水約2万7000棟、橋梁は2856（流失1394、破損538）橋が被災しました。

県内の復旧橋梁の形式選定にあたり、これまでの木橋からコンクリート、鉄の永久橋に、また幅員は5.5mに拡大して将来の交通需要にも対応できるもの、特に橋長70m以上のものは鋼橋とされました。昭和11（1936）年に正田橋、井倉橋、玉川橋、翌12年に田井橋、方谷橋、旦土大橋、江与味橋、13年に水内橋と、次々に復旧工事が進められました。

このなかで橋脚を流された田井橋は、高梁川がU字に折れ曲がる頂点に架かっていました。増水時に流速・流量が増えたため押し流されたのだと思われます。この教訓を踏まえ、

川中に橋脚を設けず80mの川幅を一跨ぎさせる桁を架ける必要から、アーチ橋の一種、ランガートラスと呼ばれる形式が採用されました。現在では珍しくありませんが、当時としては最大級のものでした。

片や方谷橋は川幅100mに架けかえるため、1連のアーチ桁と前後に繋がるプレートガーダーで結び、中央のランガーアーチの主桁を張出して吊桁とする事で、56mの桁長を確保しました。ランガーアーチは日本では昭和初期に実用化された当時の先進の橋梁です。単純トラスよりも長い径間が得られる利点から、室戸台風の復興橋梁にも多く使われています。

その後、未曾有の災害と言われる昭和47年豪雨でも被害を受けた方谷橋は、西側のプレートガーダーが架け替えられはしましたが、当時の最新技術で取り組まれたその姿を、80年を経て今なお誇らしげに見せています。

■位置図



高梁川に架かる玉川橋（S47.7）
（『昭和47年7月豪雨災害誌』より転載）



約100メートルの川幅に架けるため、中央のランガーアーチの主桁を張出して吊桁とする事で、56mの桁長を確保している。



田井橋
昭和12年竣工 下路ランガートラス1連
架け替えられた田井橋の支間長（88m）は、ランガー形式の道路橋としては日本一。



方谷橋
昭和12年竣工 下路カンチレバーランガー
西側のプレートガーダーは昭和47年に架け替えられ、また東側は国道幅員による河川埋立てによって竣工当時より短くなっている。